

町内学校巡り

国吉小の巻(2)

余木 令一

「国吉地誌」という明治の御代に毛筆で書かれた「一級」をひもといひてみたら、国吉小の敷地となつて

「コノ地ヤ町ノ中央ニ位置シテ小丘ヲナシ丘上樹木鬱蒼近ク刈谷市街ニ接シ萬木古城址ヲ雲煙ノ間ニ望ミ風光佳ナル所タリ」と。旧式な、漢文調とでもいうべき文体であるが、すこぶる名文である。この「国吉地誌」が基となつて旧校歌の一番が生まれたのかどうか私にはわからないが、また知る由もない。しかし国吉地区に唯だ一つしかない小学校の背景に、歴史的由緒の深い万木城址があることは、またと得がたい組合わせてなくてはならないであろう。歴史の遺跡を尊ぶのが民族の心

であるとするならば、それを歌う教育の面にむいたなはたらきをする筈はない。万木城の由来については、ここでくわしく述べる必要はさらさらあるまい。その昔、天然の妙形を利用して城山に築城し、ここを中心として、いわゆる城下町が形成発展された。それが、こんにち国吉を栄えさせた、いしすえとなつたとだけ記せば足りるであろう。この因果関係に思いおよべば、万木城をさし措いて国吉は論じ得ないといふことに気付くであろう。ことし二月の末つ方、私はこの記事を書くために久しぶりに、しかり、ほんとうに久しぶりに城址を訪れた。早春とはいへ寒さは未だやわらいではいながかつた。峰にのぼつて西のかたに眼を放つと、英隅川を距つて、国吉の沃野がかつせんと開け、小学校も指顧の間に見ることができた。しかし、あたりの飛涼とした静寂さは私の体に、心に、一層の冷たい何物かを感じさせずにはおかなかつた。時々シヨク、シヨクと鳴る松風の音が英雄興亡のあとを悲しく語るかのように私の耳元をかすめては消え、消えてはまたかすめるのであつた。やかた(館)の跡に今も尚掘りたされる黒米の一つが、一つは、戦火のすさまじさをしのぶに十分であり、それ故にこそ敗者の悲哀をそのままに聞かせてくれるようにも感じたのであつた。

敗者の歴史はいつも悲しみにまつられるが、その裏をそつとのせけば、そこには人のなさけの美しさが伝承されている筈で、これがまた人の心をひきつけて放さないものだ。城山の地名がいつの時代の校歌にも逸しられないのは、ここが国吉のメツカであり(ちよつといいすぎであらうか)、また校歌そのものの心につくしさを添えるからであらう。去る三月七日発表された国吉小の新校歌にも、その冒頭に「城山の松はみどりに」と歌われて



旧校歌と偶然の一致などと思ふべきものではない。詩人の心の琴線にふれるものはやはり城山の松風の悲歌にほかならないからではあるまいか。